

試水内 かわら版

66号

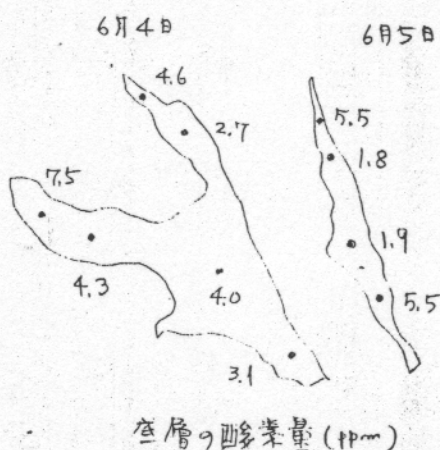
酸欠の兆

六月に入って、気温が急ぐに上がり始め、五、六日には、最高気温が三の度を越える真夏日とほりよした。

霞ヶ浦は、浅いために気温にすぐ影響が、水温も同じようになり、表面で二十五度近くまでになりまし

た。丁度この頃から霞ヶ浦の水の状態に変化が表れ始め、六月四日霞ヶ浦下の図は、六月四日霞ヶ浦

五日（北浦）の底層の酸素



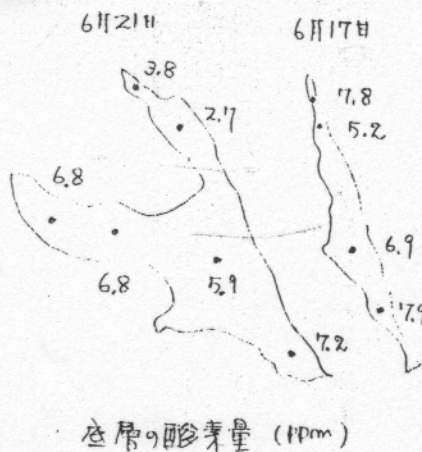
量を示したものです。

五月には、表層から底層まで十分酸素があつたのに対し、底層の酸素量が低下して見えます。

この時期、張網の魚が死んだり、網いけすのコイの餌食りか悪い、などの現象がみられたのもこの為と思われ

し、その後気温も低下し、風も結構吹いた為

で、次第に解消して見えます。左の図は、十七日（北浦）、二十一日（霞ヶ浦）の底層の酸素量の状態を示したものです。



底層の酸素量 (ppm)

ミホトになると、上旬と比べ、高梁ブリを降けは、良好といえます。

試水内図

それでは酸欠の心配が無くなったのかといえは、そうはいきません。皆さんもご存知のように、梅雨に入ると、先づ一回目の酸欠の心配に見舞われます。

これは、この時期が、秋型の植物プランクtonから、夏型のプランクtonに代る境目になっている為、プラシトンの枯死、分解、減少という状態になり、加えて、梅雨とき特有の無風、曇天という天候で、植物プランクtonからの酸素の供給量が著しく低下することに、よって起こると考えています。酸欠はこれから本番です。十分注意して下さい。